



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

公民館と地域づくり

もう随分昔のことになりますが、私は漁師から転職した駆け出しの頃の昭和四十六年から十三年間、双海町中央公民館主事として公民館に勤務しました。その時掲げた私の目標は「日本一の公民館主事」になることだったので、町内に点在する三十六の自治公民館をめぐりながら、土日も殆どない激務な住民活動に明け暮れ、私の発想した「金儲けの公民館活動」や「夫婦学級」はそれなりの成果を上げ、NHKの「明るい農村」という番組で取り上げられたこともあって、全国的に有名となりました。今思うとその番組の取材に来たディレクターが、下灘駅のプラットホームで何げなく話した、「双海町の夕日は綺麗ですね」という言葉が、後の「夕日」をテーマにしたまちづくりにつながるのですから世の中は分からないものです。

末端公民館活動の成果がきっかけで広がった、全国の人々や他地域との交流の中で、日本一の公民館主事になるためには、日本一の地域をつくらなければならぬことに気付き、理想の地域をつくるためにどうすればいいか真剣に考え始めました。まず手始めにやったのは現状を知るため、かなり密度の濃い調査を行いました。そしてその調査を原点に十三年間同じような調査を行い、学習や行動で何がどう変わったのか検証し続けました。遺し伝えるべき変えてはならないこと、社会の変化の中で変えなければならないこと、ということという二つの物差しを持ち、十年後、二十年後の地域づくりの目指す目標を「仲間と健康と生きがいを求める公民館活動」に設定したのです。今考えれば少し具体性に乏しい目標でしたが、それでも時流を得て双海町の公民館は、学習活動を基本に第二期の黄金時代を迎え、県下でも一・二を争う活発な住民自治活動を公民館が先導してやっています。

その後私は一枚の辞令とともに、産業課へ異動し村おこしを、そして四年後には企画調整室へと異動してまちづくりを担当しましたが、公民館で掲げた日本一の地域づくりという目標はそれらの活動へと引き継がれ、公民館的発想で様々な

まちづくり活動を行いました。三百五十人の町民が寝ないで語り合う「十八時間マラソンシンポジウム」や、列車を一両借り切って百人が乗り、海周りと山周りを周遊して車内でまちづくりについて語り合う「コスモス鉄道ふたみ号二千一年の旅」は圧巻で、出された意見を基に「人づくり」や「拠点づくり」、「住民参加の日本一づくり」という目標をつくり、その後まちづくりの大きなうねりとなり、行政と住民の協働によるまちづくりで、観光客ゼロに等しかった双海町に年間五十五万人もの観光客を呼び寄せたのです。

コミュニティには公民館が主体的に関わる内向きなローカルコミュニティと、行政が主体的に関わる外向きなテーマコミュニティがありますが、その両輪が回らないと定住も交流も上手く機能しないのです。

ほたるを例に取ると、双海町のほたるは柑橘産業全盛の高度成長時代に、農業や住民生活の近代化によって殆ど絶滅してしまいました。しかし、ほたると人間の共生を願った若者や公民館の地道な活動によって見事に復活し、環境省生き物の里百選に選ばれるまでになりました。ほたる保護条例を制定したり、養殖場を整備するなどした活動はその後、時代遅

れの遺物と思われた築七十年余の木造校舍、翠小学校の存続運動へと広がり、日本で最初の環境省エコ改修で校舎は見事なまでに蘇り、児童数十五人ながら今も廃校にならず生き残っているのです。さらに学校とほたるを組み合わせたグリーンツーリズム運動へと発展した地域づくり活動は、ピサ焼き体験や観光イチゴ園などへと広がり、元氣な地域として多くの観光客を集めているので

殆どの人が反対し、いわば孤軍奮闘のような形で、日本で一番海に近い下灘駅で二十七年前に始めた夕焼けプラットホームコンサートは、何もないと嘆いていた地域に、どこにでもある「夕日」さえも資源になることを教えてくれました。一回のイベントでまちが活性化するほど地域づくりは甘いものではありませんが、始める活動を続ける活動、高める活動へと進化させて行けば、マンネリになることもなく周りに波及して



行くのです。夕焼けプラットホームコンサートは、その後多くの人たちの想いによって二十七回の今日まで続き、夕日によるまちづくりも海の交流拠点シーサイド公園の整備に発展し、集客と経済を産む等地域の活性化に大いに役立っています。

公民館はややもすると古い文化の保存伝承に重きを置いてきた文化活動を展開して、担い手不足も絡んで次第にその活力を失ないつつあるように思われますが、時代が要請する新しい文化の創造だって、今日的テーマである防犯や防災もその気になればできるのです。

夕焼けプラットホームコンサートの最大の功労は、山周りに本線の座を奪われ、やがて並行路線として廃線がささやかれた、海岸周りを存続させたことです。弱者の足といわれる鉄道を存続させることは容易なことではありませんが、今では夏限定の夕焼けビール列車も大好評で、新しいまちづくりの風を吹かせ

ています。

公民館は住民の自治能力の向上と、いのちと暮らしを守るために設置されていますが、地域づくりの目標もまったく同じで、たとえたら地域づくりの視点なくして公民館が生き残ることはできないのです。公民館の事業には①問題を知らせ提起する事業、②学びの援助事業、③学びの組織化事業、④学びの還元活動事業がありますが、逆に地域づくりを目指す人たちも公民館のこの四つの事業視点を取り入れ、サステイナブルな活動を目指すべきだと思っております。「何のために」から始まる5W2H (What・When・Where・Why・Who・How・How much) を今一度考えてみたいものです。

「公民館 効果効率 名の基に 次第に姿 下りエスカレーター」
 「何のため 学んだことを どう生かす 公民館は その問い答え」
 「公民館 左遷と思う 人がいる 冗談じゃない 最も重要」
 「もし私 生まれ変わって 来れるなら 公民館主事 なりたいものだ」
 (若松進一笑売唆り)